

## 共同研究事例紹介

## もみ殻の完全循環プロジェクト

## もみ殻循環プロジェクトチーム

JAいみず野

射水市役所

(株)北陸ポートサービス

JARUS  
(社)地域環境資源センター環境工学科  
立田真文准教授

## 普及支援団体

富山県高岡農林復興センター (独)農研機構 東北農研  
(独)中央農業研究センター (株)高砂エンジニアリング  
早稲田大学



## 共同研究に至ったきっかけ

もみ殻はこれまでも、焼かれてその熱を利用し、その残った灰や炭を利用してきましたが、個人が行う程度であり世間に広まりませんでした。その残った灰や炭の品質が保証されていなかったためです。また、もみ殻を焼くと普通の木材の20倍近くの量の灰や炭が残ってしまうため、処分に困っていました。

そのような中、平成21年度の射水市バイオマスタウン構想がきっかけとなり、射水市でどのようなバイオマスタウンを構築していくかという議論の中で「もみ殻の完全循環利用」が想定されました。もみ殻は日本全国で年間約200万トン、射水市内でも年間3,000トン排出されており、それを有効活用するためにこの共同研究が始まりました。

## もみ殻は日本全土で毎年約200万トンの排出量



現在発売中の堆肥

## 共同研究の内容

もみ殻を燃やしてその後に残る燃焼灰の品質を保証し、「政府が認定した肥料」にするための研究開発をしています。もみ殻は燃えるのでエネルギーが取り出せます。毎年決まった量が出るため、安定したエネルギー源になります。専門的に説明すると、もみ殻燃焼灰を「肥料取締法に基づき普通肥料の公定規格を定める等の件」における第七項「けい酸質肥料」として、新規登録することを目的とした技術開発を行っています。現段階では普通肥料登録の認可を得ていませんので、その先行商品として、上図の農業資材を現在好評発売中です。タレントのルー大柴さんも協力していただいています。

## 今後のビジョン

もみ殻には、大きな可能性があります。もみ殻は厄介者の廃棄物ではなく、資源の少ないこの日本における数少ない貴重な資源の一つです。この研究開発を通して、もみ殻の更なる可能性が見えてきました。共同研究をさらに進めることで、更に社会に貢献できる製品を開発していきたいと考えています。

## おわりに

大学には、「知」があるかもしれませんが、「知」だけあっても何もできません。もみ殻循環プロジェクトチームは実に素晴らしいチームです。この共同研究を通じて、「共同」という意味深さを改めて感じています。みなさん、我々の今後の活躍にご期待ください!